

ばんけい

教育 ほんといちゅう

かわら版

こ みち  
教育の小径

No.164

2022 June

6月号



(一財)総合初等教育研究所参与

北 俊夫先生



今月のことば

付和雷同

明確な主義や主張をもち、わけもなく他人の意見や行動にすぐ賛成したり同調したりすることをいいます。「不和雷同」とは書きません。

## 「土砂災害防止教育」のすすめ

- 「土砂災害防止教育」は、豪雨や地震などで日本各地で多発している土砂災害から命を守る教育です。6月は「土砂災害防止月間」です。
- 各学校では、地域の実情を踏まえ、土砂災害から身を守るための教育を関係機関や家庭、地域社会と一体になって実施することが課題になっています。

## なぜ土砂災害防止教育なのか

「土砂災害防止教育」という用語は学校現場において必ずしも知れわたっている教育課題ではないかもしれませんが、一般的には防災教育といわれています。あえて「土砂災害」に焦点を当て、その防止教育を行うことには、次のような理由や背景があります。

わが国は山がちな国土です。限度を越えた豪雨によって、あるいは地震が発生すると、山が崩れ、土砂災害が発生する可能性があります。

令和2年には、全国で1319件もの土砂災害が発生しました。これは例年に発生する件数（平均発生件数）の約1.2倍にあたります。この年の7月の豪雨では、熊本県、福岡県、長崎県、岐阜県、長野県など37におよぶ府県で961件の土砂災害が発生し、過去最大クラスの広域災害になりました。記憶に新しいところでしょう。

土砂災害には、主に土石流、地すべり、急傾斜地崩壊（がけ崩れ）があります。土砂災害防止法にもとづいて土砂災害警戒区域が公表されています。国土交通省のホームページによると、令和3年12月現在で全国に約68万箇所が指定されています。これらの区域は山間地に多いのですが、東京都

港区や板橋区など23区にも指定された区域があります。区域では豪雨や地震などで土砂災害が発生する可能性があります。すると受けとめる必要があります。

私たちは土砂災害が多発しやすい国土環境のなかで生きています。このことをまず受け入れ、各学校では、地域の実情にもとづいて土砂災害から身を守るための教育を押し進めることが求められています。土砂災害防止教育は「自分の命を守る教育」です。

## 指導のポイントは何か

土砂災害防止教育にとってまず重要なことは、教師が土砂災害とはどのような災害なのかを理解し、地域の実情を把握することです。

子どもたちが生活している地域や学校が置かれている地域が、土砂災害警戒区域に指定されているかどうかを確認します。子どもたちの通学路などにも目を向けます。指定されていなくても、災害が発生しやすい場所があるかもしれません。地域に住む高齢者や土砂災害の関係者から、過去にこの地域で土砂災害が起こったかどうかを聞くようにします。その結果、すでに策定した防災計画や避難訓練の方法を見なおすことも必要になります。

次に、朝の会や学級活動などの時間

を活用して、土砂災害の特質や怖さを子どもたちに知らせます。社会科や総合的な学習の時間に、子どもたちに調べる活動を促すこともできます。

災害防止に関連する機関、例えば国や県などの河川事務所や砂防事務所などが身近にある場合には、出前授業を依頼することが考えられます。この場合には予め教育課程に位置づけて実施するとよいでしょう。

毎年6月は梅雨時期ということもあって、「土砂災害防止月間」です。行政の関係機関は啓発活動を行っています。この時期に、全校で取り組むことで機運がさらに高まります。子どもたちの防災意識を高め、自分の問題として受けとめるようにします。

土砂災害防止教育のポイントは、子どもたちに自分が住んでいる地域の災害リスクを理解させ、最低限の知識を身につけさせることです。そのうえで防災訓練や避難訓練を行います。

こうした取り組みにより、子どもたちは自然災害に対して理解と関心を高め、災害から自らの命を自ら守ろうとする意識と行動力が養われます。土砂災害防止教育を教育課程に位置づけて、学校ぐるみで実施するとともに、市役所や町（村）役場、自治会や水防団など一体になって、地域ぐるみで取り組むことが重要です。

## 今月の記念日

6月1日

## スーパーマンの日

1938年(昭和13年)のこの日、スーパーマンが初めて登場した雑誌が創刊されました。これにちなんで、アメリカのDCコミックス社が制定しました。

## 子どもの言葉

### わらくズが生きている

3年生の子どもたちが、稲のわらでぞうりをつくる体験をしていました。ぞうりに使うわらにするには、まずわらを打ち、たたいて柔らかくする「わら打ち」という作業を行います。一升瓶のような形をした木製の道具で稲のわらをたたきます。子どもたちにとってもちろん初めての体験でした。

数人の子どもたちがわら打ちをはじめると、あたりにはわらくズが舞い上がりました。子どもたちのセーターや頭にもわらくズが付いています。作業を終えたある男の子がセーターのなかに手を入れながら、次のようにつぶやきました。

「わらくズが背中に入っちゃって、なかなか取れないよ。いままだチクチクしているよ。わらくズが背中で生きているみたいだ。」

男の子は背中がむずむずして、居ても立ってもいられない様子でした。それを聞いたある女の子は「私の背中では、わらくズが踊っているみたいよ」と、言葉を返しました。

わらくズは無機質なものです。生きているわけではありません。命のないものを「生きている事象」として捉え、それを擬人化することは子どもたちが得意とするところです。

わらくズは、おとなから見れば単なる「ごみ」にしが見えません。そのわらくズに命を吹き込み、「わらくズが背中で生きているみたいだ」と言い表したつぶやきは、みずみずしい感性とともに表現力の豊かさを物語っていると言えます。

子どもは「詩人」です。言葉づくりの「名人」です。豊かな感性と発想力をいつまでも大切にしたいものです。

## 教育の動向

### 全国体力・運動能力調査

スポーツ庁は、昨年(2022年)の4～7月に小学5年生と中学2年生を対象に実施した全国体力・運動能力調査の結果を公表しています。それによると、子どもたちの体力が低下し、肥満率が増加していることが明らかになりました。

背景には、コロナ禍による自粛生活が長引いていることや、テレビやスマートフォンの視聴時間が長くなったことなどにより、子どもの生活スタイルが変化し、運動する時間が減少したことが影響しているとしています。

8種目の実技テストの結果はそれぞれ10点満点で換算し、合計80点

満点で表しています。平成30年度(2018年度)と比べると、小学男子は54.2点から52.5点に、女子は55.9点から54.7点にいずれも下がっています。特に「上体起こし」は、小学男子の平均が令和元年度の19.8回から18.9回に、女子は19.0回から18.1回にいずれも1回程度減少しています。

肥満の割合(肥満率)は、小学生の男女とも過去最大になりました。特に男子は13.1%で、令和元年度の11.1%から2%も増加しました。

今後、家庭の協力を得ながら、運動する時間を増やし、運動やスポーツをすることの楽しさと大切さを実感させる取り組みが求められます。体を動かす機会を継続してつくりま

## 北 俊夫の「実践と研究」の足あと 32

### 文部省の職場環境

旧文部省の建物は昭和7年に建てられたものでした。いまはその一部が有形文化財として残され、利用されています。石材でつくられている階段は昇り降りする人で中央部分がすり減っていました。当時のエレベーターはいまも使われています。

当時、多くの先生方から「どのようなところで仕事をしていますのですか。部屋の広さはどれくらいですか。秘書の方はおられるのでしょうか。」などと質問されたことがあります。大学の研究室を想像しているようでした。

両側に引き出しがある机と、前面に本棚がありました。机の下にも資料や図書が詰め込まれていました。落ちついて仕事をする雰囲気はなく、想像されているような快適さはありません

でした。秘書や助手はいませんでしたから、コピーをしたり資料を揃えたりする作業はすべて自分でやりました。

石材やレンガを使った古くからの建物でしたから、空調設備はよくありませんでした。夏はむし暑く、冬は底冷えするほど寒さが身にこたえました。冷暖房の期間は、気温ではなく、日にちで決められていました。暑い日はうちわでパタパタしていました。夏でも、夕方の6時を過ぎると冷房のスイッチは切れてしまいました。ただし、国会の開催中は切れませんでした。

いまのように健康志向が進んでいませんでしたから、煙草の煙が部屋のあちこちから上がっていました。

いまから思えば、けっして快適とはいえない職場環境でした。そうしたなかで、充実した仕事をする事ができたことを懐かしく思い出します。

## INFORMATION

### 社会科が好きになる 授業づくり入門

北 俊夫 著

すぐに使える!

Pick Up!

授業づくりの

I「よい授業」の要件とは何か

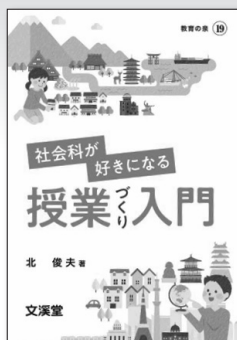
基本がわかる

II 社会科の授業づくりのポイント

3テーマ

III 社会科好きの子どもを育てる極意

A5判144ページ 定価:1,320円(税込)



## 編集後記

文部科学大臣は、教員不足の状況を受けて、知識や経験がある社会人を採用できる制度の活用や、定年退職した教員の再任用などに取り組むよう、全国の教育委員会へ要請しました。教材開発にとどまらず、学校現場の課題を解決できるサービスを企画することも、重要だと感じました。(F記)



企画・編集: ぶんげい教育研究所  
発行: 株式会社文芸堂  
発行日: 2022年6月1日